

教育愛の哲学的考察
- シュプラランガーとルソーをめぐる -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
高橋 和也

今日、これまでにないほど教育は混乱している。いじめ・不登校・学級崩壊・少年犯罪・児童虐待など、教育に関する問題は枚挙にいとまがない。この問題を解決するため、さまざまな教育方法や教育技術が次々と導入されているが、一向に問題は解決されない。それどころか、次々と新たな問題が起きている。では、何故問題は解決しないのであろうか。

筆者は、今日、教育が混乱し、次々と問題が起きている背景には、教育者を教育活動へと結びつける、そもそもの根本的な動機である教育愛の精神が揺らいでいる、ないしは、失われていることに問題があるのではないかと考える。なぜなら、どれほど先進的な教育方法や教育技術を取り入れ、教育が行われようとも、それが「子どもの成長・発展を利することをもって我が喜びとする」という教育愛の精神に真に照らされたものでなければ、その教育活動は決して豊かなものとはならないからである。教育活動を豊かなものにするためには、その基底に豊かな教育愛が溢れ出していなければならないのである。

そこで、本論文は、主としてシュプラランガーとルソーの教育思想を紐解くことで、あらゆる教育活動の原点であるこの教育愛の問題に改めて立ち返り、「それは如何にあらねばならないか」について考察する。

第一章では、その前提として、シュプラランガーがその著、『教育者の道』で定義した教育愛について考察することで、教育愛を構成するさまざまな要素や特徴について明らかにする。そのことで、なぜ教育愛には困難さがつきまとうのか、その構造上の問題を明らかにする。

第二章では、ルソーの教育思想を考察するとともに、第一章での教育愛の考察を受けて、ルソーの著した教育小説『エミール』において、一人の少年エミールを導く教師の教育活動の基底に流れている教育愛はどのようなものであるか考察する。そのことで、ルソーが抱えたであろう消極教育と自らの教育思想、そして、教育愛のジレンマについて明らかにする。

シュプラランガーは、真の教育愛はきわめて高度の、それゆえに稀な現象でしかないと述べたが、『エミール』における教師のように、子どもの成長・発展のために心を砕き続け、さらに、自分自身も高めようとするならば、教育愛が豊かに流れる教育活動を実現することができるはずである。われわれが直面している問題を解決するにあたって、教育愛の精神をもって教育に携わることが、今日において、何にもまして求められていることではないだろうか。